

メッセージアウトライン ヨハネ10：1～10「わたしは門です」

今日の箇所もパリサイ人たちとの会話の部分である。ユダヤ地方の羊は夜の間は囲いの中に入れて保護されていた。それは扉で囲まれており、その門には頑丈な扉が取り付けられ、門番だけがその鍵を持っていた。それゆえ門からでなく、ほかの所を乗り越えて入ろうとする者は盗人か強盗ということになる。(1)

「しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です」(2)これは当然のことである。門番は彼のために扉を開いてくれる。羊の牧者は朝になって羊たちを放牧するために野原に連れ出すのである。彼は自分の羊の名前を一匹ずつ全部知っており、その名で呼んで連れ出すのである。(3)牧者は自分の羊をみな、羊の囲いから引き出すと、その先頭に立って行く。羊は彼の声を知っている所以他について行く。(4)しかし、ほかの人には決してついて行かず、かえってその人から逃げ出す。その人たちの声を知らないからである。(5)パリサイ人たちはこのたとえの意味がよくわからなかった。(6)しかし、それは実は彼らに関係があったのである。

イエスはご自分のことを「羊の門です」と説明された。(7)この意味はあとでわかる。「わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです」(8)これは今イエスの目の前にいるパリサイ人、律法学者たちをはじめ、ユダヤ教の権力者たちのことを言っているのである。彼らは明確な神のみわがが行われたのにイエスを信じようとはせず、かえって殺意を抱いていた。彼らの真の姿は→マタイ23:1~7,13~14,23~28,33参照 イエスはこのようなユダヤ教の権力者たちに対して、彼らは民衆を教え指導する牧者のように見えるけれども、実は私という門を通らない盗人で強盗なのだと言っているのである。「門」とはそこを通らなければ中に入ることができないものである。羊も牧者も必ずこの門を通って中に入る。つまり誰でもこのイエス・キリストという門を通らないと救いに至ることができないということなのである。神の御子イエス・キリストは人となってこの世界に来てくださり、神の救いのご計画を知らせ、そのために十字架にかかって人類の罪を贖ってくださり、そのイエス・キリストの十字架は自分の罪の救いのためであったと信じる者は救われるという道を開いてくださったのである。このイエス・キリスト以外に救いはない。罪の赦しはないというのが聖書の教えである。そういう意味でイエスは羊が唯一入ることのできる門なのである。この場合の羊とは弱く、罪のうちに滅びるべき私たち人間のことを意味している。

「また安らかに出入りし、牧草を見つけます」(9)イエスを信じた者はイエスとの親密な交わりを持ち、真のいのちを得ることができるのである。

「盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです」(10)これは先ほど出てきたパリサイ人やユダヤ教権力者たちの姿である。

「わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです」イエスはユダヤ教権力者たちとはまったく逆に羊が豊かないのちを持つために来られたのである。そのためにイエスは十字架の死に至るまでご自分をささげ尽くしてくださったのである。私たちはこのイエスに対する信仰をしっかりと持ち、みことばに従い、主が約束してくださった豊かないのちに生きる者になりたい。